

全国資料を用いた終助詞「モノ類」の地理的分布  
—藤原与一の調査と方言談話資料『ふるさとことば集成』との対照から—  
小原雄次郎

終助詞「モノ類」（「だって雨なんだもん」の「もん」）は、北海道から沖縄まで全国に広く分布しており、いくつかの地域では形態と意味に多様性がみられる。本発表では、藤原与一の記述調査と『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』のデータを対照させることで、終助詞「モノ類」の地理的分布のありようを提示する。

藤原与一の『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』（1986:324-342）は、終助詞「モノ類」について全国規模で扱った唯一のものであり、かつ半世紀以上も前のフィールド調査のデータが用いられている。それゆえ「モノ類」を研究する上で重要な資料となっている。ただ、その活用においては記述内容の検証が不可欠である。

今春、『日本語諸方言コーパス（COJADS）』のモニター版が公開されたことで、同コーパス所収の『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』（国書刊行会、2002-2008）の分析が容易になった。本発表では、『日本語諸方言コーパス』を利用することで、藤原の研究と『ふるさとことば集成』のデータを突き合わせ、終助詞「モノ類」の地理的分布について考察を行った。

調査にあたっては、藤原与一の調査を形態の側面に絞って定量化することから始めた。藤原は終助詞の各形態が各県でどの程度用いられているかを「〇〇県下では～がさかんである」や「～が見られる」のような表現で記述しているため、これらは「高頻度の使用」と「一定の使用」の二段階に分け、それが『ふるさとことば集成』での出現数と対応しているかを調べた。調査の結果、藤原のフィールド調査と『ふるさとことば集成』のデータはおおむね対応していることが確認できた。また、両資料が対応しない部分からは、それぞれの資料の性質の違いが浮き彫りになった。